

制度経済学の哲学的基礎

—ヒュームとパースの制度進化論—

柴田徳太郎（東京大学）

新古典派経済学的方法的個人主義に基づく合理的で利己的な経済人仮説を批判し、代替的な人間像を構築するためには、「制度」とは何か、「慣習」とは何かという問題を考えてみる必要がある。「制度」あるいは「慣習」に依存する人間像は有力な代替モデルだからである。「制度」とは「思考習慣」であると定義したのは、制度派経済学の創始者 T.ヴェブレンである。だが、彼は「制度」と「本能」の関係については詳細に論じたが、「制度」がどのようにして生まれ進化するのかについては詳しく論じていない。この問題を掘り下げて論じたのはヴェブレンの後継者 J.R.コモンズであった。彼は制度の生成と進化に関する議論を展開する前提として、ヒュームとパースの慣習論の詳細な検討を行っている。そこで、本報告では、コモンズが彼らの慣習論をどのように評価したのか、そして、どのように継承したのかを検討する。

1. ヒュームの懐疑論と慣習論

コモンズはヒュームの慣習論を高く評価する。それは、ヒュームが「心の2つの概念」すなわち「ロックの受動的な概念」と「能動的な概念」を明確に区別し、後者を重視するからである。ロックは「全ての観念を知的模写と合理的内省に還元する」。ロックの「模写」としての「観念」は、「外的対象のありのままの写像 (dry pictures)」である。ロックの調和的な「自然法則」の観念は「過去に発せられた神の命令」であり、心は外的対象としての調和的な自然法則を「白紙」(タブラ・ラサ)に模写するというわけである。この「受動的な心の概念」をヒュームは拒否する。第1に、神ではない人間の合理性には限界がある。第2に、自然は斉一的であるとは限らない。ゆえに、①人間の合理性の限界と、②根源的不確実性を前提にすると、調和的な外的自然法則を心が知的に模写するというロックの「心の受動的な概念」は受け入れがたい。

ヒュームの場合、ロックとは異なり、「全ての観念」は「単なる主観的な心持ち (feelings)」に還元される。「心は、ロックやパークリーのように自分自身の心持ちを知っている精神ではなく、自分自身を知り得ない心持ちの継起にすぎない」。「心は実体ではなく、観念を持つ継続的な機関でもない」。そうすると、「世界は心持ちの継起にすぎない」ということになり、「心は知性のようにこれらの心持ちの間の実在する結合を知覚することはない」。こ

うして「ヒュームは、哲学的には究極の懐疑主義に到達する」。しかし、「現実的にはそうではない」。過激な懐疑主義は現実には判断停止に陥り、人間生活が困難となるからである。そこで、ヒュームは人間の判断基準を「活動」と「慣習」に求める。「活動は我々に経験をもたらし、経験は観念の連合（類似、接近、因果）」である。では、観念の連合はどのようにして生まれるのか。「習慣」あるいは「慣習」によってである。では、「慣習」はどのようにして生まれるのか。

ロックの場合、外的対象の模写が観念であったが、ヒュームの場合、「印象の模写が観念」である。「印象は内的で消えゆく存在」である。したがって、我々は「印象が外的な実体と関連していることを知らないし、内的な精神と関連しているかもわからない」。この「消えゆく印象」は「観念」に模写される。この場合、「印象」は感覚・情緒・情感を含む概念で、「観念」は思考や推理における感覚・情緒・情感の淡い影像を意味する。「外的印象」の内的反復が「観念」であり、「観念」は新しい種類の印象を作り出すことが出来る。これが「内省の印象」である。(J.R.Commons,*Institutional Economics*,1934,pp.144-6)

印象には2種類ある。「感覚」の印象と「内省」の印象である。前者は未知の原因から精神に原生的に起こる。後者は観念から生まれる。その順序は次の通りである。まず印象が感官を打って様々な種類の寒暖、飢渴、快苦を知覚させる。この印象は心によって模写され、印象が止んだ後も残る。これを「観念」と呼ぶ。この快苦の観念は精神に戻ると欲望や嫌悪、希望や恐怖などの新しい印象を生み出す。この新しい印象は内省に由来するがゆえに「内省の印象」と呼ばれる。この「内省の印象」はさらに記憶や想像により模写されて観念となり、その観念はまた他の印象や観念を生じる。(Hume[1978]:7-8)

「内省の印象」も心持ちであるが、欲望、嫌悪、希望、恐怖のように主に未来への期待である。ヒュームの意見と信念の概念を構成するのはこの「内省の心持ち」である。そして、信念は現在の感覚からは生まれ得ないが、現在の感覚なしでも生じ得ない。信念は、ヒュームが「習慣」あるいは「慣習」と名付けた反復とは切りはなしえない。コモンズは『人生論』からの引用を踏まえて、ヒューム説を次のように整理する。「意見と信念は、現在の印象と関連しあるいは結びついた生き生きとした観念である」。ヒュームは「自然の法則」を「習慣に由来する単なる期待」と見なす。「未来が過去に似るという推測は、全て習慣に由来する」のである。

このように、ヒュームは、経験の反復の中から習慣が生まれ信念が生じると論じた。その際、ヒュームは「想像」が果たす役割に注目した。観念の現れ方には2通りある。「記憶」と「想像」である。新しく出現するに当たってはじめての活気を多分に保留して印象と観念

の中間の趣を示すのが「記憶」で、印象を反復する機能を持つ。だが、「記憶」は元々の諸印象の順序・形式を組み替える能力は持たない。これに対して、「想像」は印象の活気を維持する能力には劣るものの、元々の諸印象の順序・形式を組み替える能力を持っている。印象が観念を生み、その観念が内省の印象を生み、その印象が観念を生むというような心の能動的作用が経験の反復過程において働くとき、「想像」が習慣（観念連合）を組み替える役割を果たしていると考えられる。

では、「想像」はどのように習慣（観念連合）を組み替えていくのであろうか。ヒュームは「想像」の2つの作用を区別する。第1が「熟慮に依存しない」、既存の習慣に自動的に随う「習慣的作用」であり、創造性に乏しい。習慣を再確認し、信念を強化する役割を果たす。第2が「迂遠な様式で起こる」「想像」の「内省的作用」である。これは、既存の習慣に従っていてもうまくいかない時に仮説を形成して「隠れている原因」を探る創造的作用である。前者が習慣に無意識に従い習慣を再生産する機能であり、後者が習慣を修正あるいは組み替える機能であるといえよう。

以上のように、ヒュームの習慣論には「心の能動性」についての考察が含まれているが、この点をコモンズは高く評価し、次のように論評している。「心が受動的であるなら、消えゆく感覚間の関係を知覚することはない。しかし、もしも心が能動的であるならば、消えゆく感覚の部分と全体の関係の推測に基づき、心は創造し、感じ、活動する。ヒュームが破壊したのは受動的な心の観念であり、彼が予言したのは能動的な心の観念であった」。

2. パースのプラグマティズム

「能動的な心」の観念を予言したのはヒュームであったが、「能動的な心」の概念を創造することによって（1878年に）ヒュームの懐疑主義に終止符を打ったのは、アメリカプラグマティズムの創始者であるチャールズ・S・パースである、というのがコモンズの評価であった。パースが解決したヒュームの限界とは何であったのか。第1の限界は、「受動的な心」の概念からの脱却が不徹底で、「仮説形成」によって「習慣」を「創発」する「心の能動性」の解明が不十分であったという点である。コモンズはパースの1878年に書かれた論文（"How to Make Our Ideas Clear"）から引用し、次のように論じる。

パースは、意識には2種類の要素があることに注目する。それは、「感覚そのもの」と「感覚間の関係」である。一例を挙げると、音楽作品における分離した「音符」と「旋律」である。ヒュームの印象と観念は「音符」であり、分離した時点における孤立した心持ちである。それは「旋律」ではない、なぜなら「旋律」は時の流れを通じた心持ちの継続であるからだ。「旋律は、音の継起における秩序」の中に存在する。したがって、ヒュームの

心の観念は外からの印象の受動的な貯蔵所であり、一時点にしか存在しないのに対して、パースの心の観念は能動的で、印象の継続的な組織者であり再組織者である。パースの心の概念は印象の能動的組織者の概念であるので、ヒュームの「印象」それ自身は今や、類似、接近、継起によってのみ連合する分離した印象として心にやって来る代わりに、全体の活動、過去、未来と部分の関係として把握される。心は印象を待つのではなく、継続的に印象を期待し、部分に分解し、新しい心持ちを再構築する。この新しい心持ちはヒュームの受動的な印象ではなく、未来の行動に到達するパースの能動的な信念である。

コモンズが指摘するヒュームの第2の限界は、ヒュームが個人的な偏見 (bias) である習慣 (habit) と、共同体内で共有される習慣である「慣習」(custom) を区別していないという点である。ヒュームの「慣習」は個人的な「習慣」で、個人の経験、感情、期待に限定され、集合的意見による道徳的強制の影響を受けない。しかし、「慣習」は集合的に行動する他の人々の経験、感情、期待を含むものである。「習慣」は1人の人間による反復であるが、「慣習」は人々が入れ替わる継続する集団組織による反復であり、個人に強制する効果を持つ。ヒューム習慣論の個人主義的限界を打破したのが、パースのプラグマティズムである。ヒュームの習慣は個人の経験に基づくものであり、信念は個人的偏見であった。パースは個人的偏見を科学的信念に転じる。個人的偏見は、多数の人々の実験による社会的確証を通じて科学的信念に転じる。個人的な「習慣」が集合的な「慣習」へと転化し、意見の社会的一致がもたらされる。

以上のように、ヒュームの2つの限界—①観念連合説の受動性、②個人主義的習慣論—を解決したのがパースであった。パース慣習論の能動性と共同性という特徴は、記号論と探求論に良く表れている。パースの記号論は、「記号」—「対象」—「解釈思考」という三項構造を成している。「黒い雲」を見た際に「降雨」を予測し、外出の際に傘を持参する例を考えてみよう。この場合、「黒い雲」を見るという直接経験は単なる情態に過ぎず、いかなる意味も知的価値も持っていない。だが、次の瞬間、この「黒い雲」が「降雨」の「予兆」(記号)と受け止められると、「黒い雲が見えるので雨が降るだろう」という推測(思考)が行われ、「黒い雲」は「降雨」を表象する「記号」となる。この場合、「黒い雲」(記号)が「降雨」(対象)を表象(代表)するのは、「黒い雲は降雨の予兆である」という推測(解釈思考)に媒介されているからである。

さて次の瞬間、この予測が当たって「雨」が実際に降ってきたら、『黒い雲が見えたので雨が降るだろう』という予測は当たった」という思考が後続することになる。以上の過程を要約すると次のようになる。①黒い雲の直接経験(単なる情態)→②「黒い雲」は「降

雨」の「予兆」(記号)と解釈され、「降雨」が予測される→③実際に「降雨」を経験する。
→④『『黒い雲が見えたので雨が降るだろう』という予測は当たった』と判断される。ここでは、後続の思考による先行の思考の解釈(推測は正しかったという確認の判断)が行われている。「黒い雲が見えたので雨が降るだろう」という先行する思考は、後続する思考において予測判断を表象(代表)する記号となっている。もしも、この予測判断がはずれて、雨が降らなければ、『『黒い雲が見えたので雨が降るだろう』という予測ははずれた』という否定的な判断がなされ、その理由の解明へ向けて探求の旅が始まる。その第1段階は、仮説形成の過程である。この探求の旅は、さしあたりは「黒い雲は降雨の予兆である」という法則一般の修正ではなく、阻害要因の解明に向かうであろう。

このように、先行する思考は後続する思考において記号となり、何らかの意味を表象(代表)し、後続する思考によって解釈される。思想習慣は経験による検証を受けながら日々連続的に進化しているのである。思考は時間的に流れているというだけでなく、コミュニケーションを通じて人々の間に連続的に広がっていく。この広がりを可能にするのも、記号の表象(代表)機能である。Aが「あの男は知事だろう」と推測を語り、Bが『『あの男は知事だろう』という推測は間違いだと思ふ。なぜなら、あの男は軍服を着ているので知事ではなく、軍司令官だろう』という新たな推測を語る。ここでは、Aの思考(推測=仮説)が、後続するBの思考の中で記号となって解釈されている。もしも、AがBの新たな仮説を受け入れるとすれば、①Aの思考(仮説形成)→②Bの思考によるAの思考(仮説)の解釈(否定)と新たな仮説形成→③AによるBの思考(新たな仮説)の解釈(受け入れ)、という形で、両者のコミュニケーションを通じて、思考が連続的に再解釈され修正されていく。このように、対話を通じて両者の「解釈思考」の摺り合わせが進行していく。

思考過程の時間的連続性は記号過程の無限の連続性によって支えられており、記号と対象を媒介する解釈項は無限に再解釈され、進化を遂げていく。この記号過程は、社会的に共有されているので、思考過程と記号過程の連続性は無限のコミュニケーションの過程でもある。こうして、集成的な思考習慣の進化が記号の進化として無限に行われていく。

集成的思考習慣の創造的進化の問題は、パースの探求論において次のように論じられる。既存の思考習慣(信念)と矛盾する「驚くべき現象」の発見→「驚くべき現象」を説明できる仮説の形成(発見)→演繹推理による仮説の検証→演繹で得られた帰結と経験の一致を確かめる帰納推理→「驚くべき現象」を説明できる思考習慣(信念)の確立、という過程を通じて人間の集成的思考習慣は進化する。このように、慣習の創造的進化においては、遡及推理による仮説形成という推論形式が重要な役割を果たすのである。

3. むすび

パースの探求理論の目的は、自然法則の発見であった。それゆえ、パースのプラグマティズムを経済取引や経済組織に直接適用することは困難であり、ディーイのプラグマティズムの媒介が必要になるというのがコモンズの考え方であった。パースのプラグマティズムの基準は「真理の探究」であったが、デューイのプラグマティズムの基準は「望ましい社会的結果を導くかどうか」であった。この基準はヒュームの慣習（コンヴェンション）に類似している。それゆえ、コモンズはヒュームのコンヴェンションを重視する。その内容は「社会的効用」であり、ベンサムのような個人的効用の総和という功利主義とは異なる性格のものである。

コモンズが考えていたように、デューイのプラグマティズムの基準を媒介にすれば、パースの慣習論を制度進化論に生かしていくことは可能であろう。集合的「思考習慣」が「制度」であるとすれば、「制度」は記号過程を通じて進化し続けるといえる。あるいは、「記号過程」そのものが「制度」であるとも考えることもできる。具体的には、言語、法制度（私的所有権、労働法規、金融諸立法などを含む）、貨幣などが思い浮かぶ。「言語」、「貨幣」、「正義と所有」のように、ヒュームが「コンヴェンション（慣習）」と呼んだものを「記号過程」として捉え返すことによって、制度の生成・進化の過程をよりダイナミックに把握することが可能となるだろう。

その一例が、J.R. コモンズの制度進化論である。彼は、制度を「個人行動を制御し、解放し、拡大する集合行為（Collective Action）」と定義する。例えば、私有財産を守る私制度は、他人の財産を奪う自由を禁止することによって、個人の経済活動の自由を拡大する。「その集合行為の形態は、組織化されていない慣習および組織化された Going Concern である」。そして、「慣習と Going Concern による制御は、個人の行動を支配する行動準則（working rule）によって行われる」と論じる。行動準則による集合行為（あるいは集合活動体）は4つの役割を果たす。（i）不確実性に直面する個人が抱く期待の実現を保証する。そのために、（ii）他者と期待を調和させる。（iii）個人に行動の自由を与える。それは同時に、（iv）他者を他人の自由の影響に曝すということでもある。このように、制度進化は、Going Concern の行動準則の歴史的進化として捉えられていたのである。